

平成26年度 小城市立芦刈小学校・芦刈中学校 学校評価結果

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
ふるさとを愛し、未来を拓く、心身ともに元気な子どもの育成	① 小中一貫教育による9年間を『つなぐ』教育活動の充実 ② 「確かな学力」の保障 ③ 「心の教育」の充実 ④ ICT活用教育の推進

達成度
 A: ほぼ達成できた
 B: 概ね達成できた
 C: やや不十分である
 D: 不十分である

3 目標・評価

① 小中一貫教育による9年間を『つなぐ』教育活動の充実

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○小中一貫教育	・9年間をつなぐ教育の推進	・既存の小中合同行事を充実させるとともに新たな行事を創設し、その意義について周知を図る。 ・『授業』研究部、『つなぐ』研究部の研究を推進する。 ・学習メソッドに基づいた授業を推進する。 ・家庭学習の手引きの活用を強化する。	・体育大会等、行事の一つ一つにおいて目的や意義について児童生徒及びその保護者へ各種便りや指導の場により周知する。 ・『授業』研究部、『つなぐ』研究部の研究を年間計画に位置づけ、全職員の共通理解のもと、授業研究を実施する。 ・兼務職員による小中一貫、中一への授業(TTを含む)を年間を通して行う。	A	・小中一貫校1年目として実施した行事の意義や成果を、学校便りや学級通信、HP等で保護者に細やかに伝えることができた。 ・コミュニケーション活動の公開、研究授業参観及び協議会を小中の垣根を超えて、全職員で実施することができた。 ・兼務職員による小中一貫の授業を計画的に進めることができた。	・行事や活動の紹介で終わらず、小中一貫校の特色を活かした取り組みに焦点を当て、児童・生徒の成長がわかるような伝達をしていく。 ・「学び」に生きるコミュニケーション力を更に向上させるために、学び合う前に「個々で課題追究や理解定着を図る学習」に取り組む方法を考える。 ・児童生徒の自主的な学習につながる「家庭学習の手引き」の活用の方策を見直す。
学校運営	○開かれた学校づくり	・家庭・地域との連携強化	・学校ボランティア参加人数をのべ250人以上、関与授業時数を60時間以上とする。 ・学校の情報発信に対する保護者の評価を80ポイント以上とする。	・学校支援ボランティアの周知を進めることで登録者数の増加を図る。 ・学校支援ボランティアを活用するための授業を増やし学校の受け入れ態勢を広げる。 ・学校からの情報発信の充実。(学校便り、学級通信、各種便り、学校HP等の内容の工夫や定期的な発行・更新。)	B	・地域ボランティアの登録者は微増であったが、参加のべ人数は、1月現在681人で、目標人数を達成することができた。 ・ボランティア活用の受け入れが広がり、職場体験や教科の分野で新しい取組ができた。 ・保護者78.2%、教職員80.5%の達成であった。	・新たな参加者が生まれるようなボランティア活動になるよう、関係機関との連携を図る。 ・保護者に発信したものが届くような手立ての工夫や、教育活動に関する保護者の関心を高めるような内容の工夫が必要である。また、家庭教育指針については、調査結果を保護者に発信するなどの工夫が必要である。

② 「確かな学力」の保障

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○教職員の授業力向上	・小中連続した指導法の研究	・小学部、中学部の全教職員による授業研究会を実施し、小中連続した指導法での授業が展開できるようにする。	・小学部、中学部の全教職員による授業研究会を年3回実施する。 ・ブロックごとの授業研究会を充実し、全員が公開授業を行い、指導力の向上を目指す。	B	・教職員のアンケート結果によると75.6%の達成率であった。 ・年間3回の全校授業研究会を実施した。どの教科においても、コミュニケーション活動が有効的に取り入れられており、熱心な協議が行われた。 ・全職員が公開授業を行い、事前・事後の研究会を通して、研究を深めることができた。	・全校授業研究会を行い、全職員でよりよい指導法を探る。 ・研究推進委員会等を活用し、1年生から9年生までを系統立て、思考力・判断力・表現力を伸ばすために有効な手立てを探る。
教育活動	●学力向上	・基礎的内容を活用する力の育成 ・主体的に課題を見だし、探究する力の育成	・県および全国学習状況調査において、県の通過率を上回る。 ・12月実施の評価テストにおいて、4月実施の課題の改善を図る。 ・家庭学習の定着を図り、保護者アンケートにおいて、「家庭学習習慣ができています」項目を70ポイント以上とする。	・個別指導を積極的に行い、学習への意欲喚起、学習の仕方についてアドバイスを行う。 ・小中兼務教職員によるきめ細かな指導を随時行う。 ・「芦刈学習メソッド」をもとに、生徒が主体的に取り組む、考える授業を日々実践する。 ・学校と家庭が連携し、「家庭教育の指針」の実践を推進させるため、強化週間の設置やアンケート調査を行い意識強化を図る。	B	・12月の評価テストにおいて、小学部は算数科において、県平均正答率を大きく上回ることができ、国語、社会、理科においても県平均正答率を上回ることができた。授業づくり、朝の時間の活用、宿題の効果的な出し方などを職員が共通理解し、組織的に継続的に取り組んだ結果である。中学部は国語科は県平均正答率を上回ることができた。数学科は、県平均をやや下回ったが、中2の数学科は4月より改善がみられた。苦手とする傾向の問題に継続的に取り組んだ結果である。 ・家庭学習の定着においては、学校評価の保護者のアンケートにおいて、「家庭学習習慣ができています」項目において、全体で68.9%の達成率であった。「家庭教育の指針」の実践を推進させるために、強化週間を設けたものの、課題を忘れてくる児童生徒はまだみられ、さらなる家庭学習習慣化を図るために、家庭と連携していく必要がある。	・学習メソッドや学習規律、家庭教育指針等を活用し、学習状況を検証しながら、芦刈親潮校として1年生から9年生までの一貫した効果的な学習のあり方を探っていく。 ・朝の時間の活用についても、1～9年生の取り組み方を検討していく必要がある。
特定課題	●小学校低学年の学習環境の改善充実	・小学校低学年の指導に関する計画書の内容の達成	・小学校低学年の基本的な学習習慣と基本的な生活習慣の定着を目指す。	・「生活ふりかえり表」を作成し、低学年で共通した目標を設定し、基本的な生活習慣の定着を図る。 ・学習道具の準備など、基本的な学習習慣の基礎となることを、日々の指導に確実に定着させる。 ・話し型、読型を活用し、低学年から話を聞く態度を徹底して身に付けさせる。	B	・保護者用のアンケート結果によると、1年生では、75.8%、2年生では67.9%の達成率であった。また、教職員のアンケート結果によると66.7%の達成率であった。 ・「生活ふりかえり表」に合わせた書きかき添削を行った。しかし、前日にきちんと確認していない児童も、まだ見られる。 ・授業に出ている先生の先生からも同じ指導をしてもらうことで、学習習慣、生活習慣の約束が身に着いてきた。	・「生活ふりかえり表」の内容を検討することでよりよい振り返りができるので、各学年で「生活ふりかえり表」の項目、内容をどのようにするか話し合う必要がある。 ・TT指導など複数の教師が関わったことで、生活面、学習面において、きまりを守り進んで取り組むことができた。毎年取り組んでいるように、教師が共通して指導にあたる必要がある。

③ 「心の教育」の充実

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○不適応対策・不登校対策の充実	・不適応行動の未然防止と完全不登校の解消	・小学校段階で発露する不適応行動を未然に防止する。また、中1段階での不登校傾向の発生を未然に防ぐ。 ・年度当初から不登校及び不登校傾向である児童生徒を、年度内に登校できるようにする。	・小学部、中学部合同の教育相談研修会を毎月開催する。 ・児童生徒一人ひとりの状況把握を強化し、個に応じた支援を早期に行う。 ・スクールサポーター、心の教室相談員との連携を図り、生徒の心の安定を図る。 ・学期当初や長期休業明けの教育相談を充実し、家庭との連携強化を図る。	B	・校内の関係者が、問題を抱えた児童生徒の情報を共有し、一人一人に応じた具体的な支援のあり方を検討、適切な対応を行った。 ・「気になる児童生徒」については、スクールカウンセラーや心の教室相談員との連携を図るとともに、子どもの支援センター等の専門機関につなげて、指導助言を受けることができた。 ・「生活ふりかえり表」について、全職員の共通理解が十分ではなかった。	・毎月開催している教育相談部会の持ち方を工夫する。 ・長期休業中の教育相談研修会をより充実したものにす。
教育活動	●いじめの問題への対応	・いじめの早期発見と迅速な解決体制の確立	・児童生徒のいじめ防止に対する意識を高め、いじめを許さない学校風土を定着させる。 ・一人一人の児童生徒の気持ちを細やかに読み取り、より深い教育を実践する。	・児童会や生徒会によるいじめ0宣言を行い、生徒どうしでのいじめに対する意識を高める。 ・道徳の時間において、いじめについてじっくりと考える授業を設定する。 ・気になる事案については全職員で迅速に対応し、関係機関との連携を図る。 ・生活アンケートを毎月実施し、いじめの項目を設定する。 ・スクールサポーター、スクールカウンセラー、心の教室相談員へ生徒が相談しやすい環境をく。	A	・道徳の時間に、いじめや友達との関係についてじっくりと考える授業を行い、「ふれあい道徳」で各学級の取り組みを保護者や地域の方々と公開した。 ・生徒会でのいじめの宣言「取り組み、また、「ばかばか親潮の木」の取り組みにより児童生徒同士のつながりや相手に対する思いやりの心が育っている。 ・指導を要する児童生徒・気になる児童生徒への対応について全職員で共通理解を行い、学級の温かい雰囲気作りができています。	・「ばかばか親潮の木」の取り組みについては、継続的な取り組みにしていきたい。 ・個別の支援が必要な児童生徒が、学校規模の割に多く在籍しているため、今後も引き続き小中一貫の良さを生かしてつながりのある支援を行ったり、全職員の共通理解を図り情報交換に努めていく。
教育活動	●心の教育	・豊かな心の育成	・80%以上の児童生徒が自分の「豊かな心」の成長を自覚する。 ・QUTテストの学級満足群の割合が、1回目実施より2回目実施が高くなるようにする。	・1～9年生までの縦割り班活動を行い、「思いやりの心」「責任感」「人と関わる力」を育む。 ・「あしかり学」の実践を通して、郷土の文化や伝統についての理解と愛着を深める。 ・年間計画に沿った道徳教育の実践に取り組むと共に、全ての教育活動における心の教育の充実を職員が意識する。	B	・児童・生徒のアンケート結果によると、85.8%の達成率であった。 ・縦割り活動は、計画していた回数を行うことができなかった。 ・QUTテストの学級満足群の割合は、1回目実施より2回目実施の方が高くなった。1回目のQUTテストをともに、研修を行い、学年間の課題に対する具体的な手立てを考えた。	・縦割り活動が、「交流」から「意義ある活動」へとなるために、内容を練り直す必要がある。 ・QUTテストをともに、課題への対応策を、学校全体で共通理解し、取り組む。

④ ICT活用教育の推進

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●ICT活用教育の推進	・電子黒板を活用した効果的な授業実践	・電子黒板やタブレットパソコンを活用した授業に積極的に取り組む職員を全体の80%以上とする。 ・ICT活用授業を「わかる」「楽しい」と感じる生徒の割合を80%以上とする。	・ICT推進リーダーを中心に、支援員の協力を得ながら、日常的に「ミニ研修会」を行い、機器操作と効果的な利用法の習得を行う。 ・校内研究の授業では、ICT機器を活用し、その活用方法について全職員で研究を深める。 ・ICT活用に関する各種研修会を受講する。	B	・教職員のアンケートによると、84.6%の達成率であった。児童・生徒アンケートで、「電子黒板などを使った授業がよく行われている」の達成率は、92.0%である。 ・校内研究の授業でICTをよく活用し、全職員で研究を深めることができた。	・「効果的な活用」ができるように、実践事例を共有していく。 ・「ミニ研修会」を確実に実施するとともに、定期的に実践事例を全職員で共有していく。 ・児童・生徒の意欲や興味関心の喚起のみを目的とせず、ICT活用を通して、到達度や理解度が深まっているかを目的とした活用を実践していく。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	・健康・安全教育の推進	・健康安全に係る教育活動の充実を図る。	・小中において計画的に発達段階に応じた防煙、性教育、薬物乱用防止等の講話を実施する。 ・年間を通して、健康に対する意識の育成と危機管理の対応を啓発する。	B	・防煙、性教育、薬物乱用防止等防煙等の取組に対する保護者アンケートでは72.3%、教職員のアンケートでは78.9%の達成率であり、全ての講話を計画的に実施することができた。 ・健康や安全への意識は児童生徒のアンケート結果によると、82.6%の達成率であった。毎月保健日より発行するとともに、歯と口の健康やインフルエンザについて、全体指導を行った。児童保健委員会や生徒保健部の活動を通して、健康や安全に関する知識の啓発を図れた。	・次年度は、講話について、発達段階に合わせた内容と講師の選定を行っていく。
教育活動	○読書推進	・読書活動の推進	・学校図書館年間1人当たり貸出数を35冊以上に上げる。	・子どもの読書を推進する活動(読書マラソン、図書館まつり、読書週間等)を充実させる。	B	・年間計画に従って業務を進めることができた。 ・年間の貸出冊数は、全校で見ると一人平均71.3冊で目標に達成した。しかし、小学部では100冊、中学部20.3冊であった。 ・児童・生徒の読書についての意識調査の結果を見ると、4～5年生は70%、6年生以上になると50%に満たない学年もあった。	・小学部6年生以上の読書に対する関心を高めるとともに、読書の向上を図るための具体的な方策を実施していく。 ・全校児童・生徒の読書量を上げるための取組を検討し、図書館行事の内容に加えていく。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

本校は、本年度4月に芦刈小学校と芦刈中学校が一つとなり、校舎一体型小中一貫校として開校した。そのため、本年度は、重点教育目標の軸に「小中一貫教育による9年間を『つなぐ』教育活動の充実」を据えて学校経営に取り組んできた。これまで小学校と中学校が別々に取り組んできた教育活動を9年間の「学び」と「育ち」をつなぐ教育活動へと改善していく年度となり、多くの成果が得られるとともに、今後、更に改善、進化、発展させるべき取組やポイントも数多く顕在化した。その点が、今年度の学校評価結果の各項目及び達成度に表れている。
したがって、今年度の学校評価は、次年度以降の本校の教育活動の指標であり、指針となるものである。次年度も、9年間の「学び」と「育ち」をつなぐ小中一貫の教育活動の充実を踏まえ、「確かな学力」と「豊かな心」の育成を実現させる取組を実践していく。

●は共通評価項目、○は独自評価項目